

ベトナムの大学における日本留学のための予備教育 ーコミュニケーション力と自己表現力の育成をめざす 総合活動型教育の試みー

阿蘇 豊

キーワード

日本留学, 予備教育, 日本語集中コース, 総合活動型教育, 聴解演習, 総合アクティビティ

はじめに

筆者はベトナムのハノイにあるハノイ工科大学で、2008年9月から2010年7月までの2年間に、日本に留学予定の20人の学習者を対象とした日本語集中コースを担当した。初めて設置するコースだったこともあり、学生名簿以外の情報が何もない状態から始め、コースデザイン、教材選定、カリキュラム作成を行い、授業の大半を一人で受け持ち、3月には20人を日本の大学に送った。

本稿は日本での留学生活に不可欠なコミュニケーション力および自己表現力を育成するためにベトナム人学習者に対して行った、主に2年目の活動の報告である。アジアの一隅で、相談する人もいないまま試みた活動の全容をありのまま述べることは、経過、結果の良し悪しにかかわらず、同じような教育環境にある方々の参考になるのではないかと考えた。

1. ハノイ工科大学における日本語集中コースの概要

1.1 HEDSPI について

ハノイでの私の所属先はHEDSPIというプロジェクトであった。HEDSPIとは「Higher Education Development Support Project on ICT」の略名である。このプロジェクトは日本語のできる高度ITベトナム人人材を育成するために、2006年9月から始まった。日本のODAを利用し、ハノイ工科大学に特別コースを設け、日本側のパートナー校を立命館大学と慶應義塾大学として実施されている。毎年120名余の入学生を受入れ、2年半の基礎教育と日本語教育の課程修了後、上位20名を選抜し、日本の立命館大学と慶應義塾大学へ派遣し、3年生に編入、2年間の教育を行い両大学の学位を授与することになっている。

コースを創設して3年目の2008年、3年生ができ、9月から日本語集中コースが始まった。

1.2 日本語集中コースの目標

コースを開始するにあたって、まず目標を設定する必要があると思った。しかし、当時の学習者の日本語レベルは、初級が終わり中級に入ったばかりという程度で、日本語能力試験の2級に合格できるかどうかを心配していた。その状況から、6ヶ月の学習で日本の主要大学の3年生レベルにまで持ち上げるのは、困難なことに思えた。それでコースの到達目標を以下のよ

うに作成した。

- 大目標：日本の大学生活に適應できるレベルの日本語力の獲得を目指す。
 - ・講義内容が理解できる程度を目標にすえた「読解力・聴解力」の増強。
 - ・自らの考えを口頭および文字の日本語で表現できる力を養う。(話す、書く力の向上)
 - ・レポートの実習、専門書、論文に慣れる。

1.3 学習時間、学習者、機材等

2年目の日本語集中コースに関する基本的な情報は以下のとおりである。

学習期間	2009年9月7日(月)～2010年2月26日(金)
学習時間・コマ数 (1コマは45分)	1週間の学習コマ数：8コマ(9月, 10月), 6コマ(11月, 12月), 30コマ(1月, 2月) 総コマ数：9月32コマ, 10月34コマ, 11月27コマ, 12月9コマ, 1月90コマ, 2月60コマ⇒計252コマ=189時間 ⁽¹⁾
学習者	ハノイ工科大学のIT専攻の3年生120名から特別選抜テストによって選ばれ、 日本留学が確定した20名(男子19名, 女子1名)
教室・機材等	グループ活動を多く行うため、教師と学習者が向き合う対面式の机ではなく、自由 に移動できるイスと3, 4人で囲める机があるパソコン教室を使用した。また、 各グループに1台ずつ大学からノートパソコンを貸与してもらった。

1.4 授業科目

前述の目標に沿って、全体では9つの授業科目を組んだ。コースの全容を示すため以下に7つの科目について簡単に記す。次の2で、目標を果たす上で主要だと思われる2つの科目、「聴解演習」「総合アクティビティ」について詳しく述べる。

科目名	内容	コマ数
①読解演習	「いまさら聞けない科学の常識・1」を使った読解	20
②ドラマ	アニメ、テレビドラマの聞き取り	20
③日本事情	写真パネルを使ったショートプレゼンテーションと「日本の生活案内 外国人研修生・技能実習生必携」の読み	20
④文章表現	ベトナム語、英語で書かれたものを、分かりやすい日本語に置き換え、表現する	20
⑤発音	単音、ミニマルペア、拍、アクセント、イントネーション	10
⑥IT日本語	IT用語集の改訂	20
⑦試験対策	日本留学試験、日本語能力試験の対策授業 ⁽²⁾	30

2. 主要な二つの科目

このコースの大目標としてあげた、「日本の大学生活に適應できるレベルの日本語力の獲得を目指す」ために、まず大学の講義、また日常出会う日本人の日本語を聞き取る力をつけることが急務だと感じた。そのための科目が「聴解演習」である。

また、相手の発した日本語に日本語で反応できる力、つまり耳にした日本語を理解し、頭に浮かんだことを日本語で表現できる力も育成する必要があった。「総合アクティビティ」と名

を打った活動がそれである。

2.1 科目名：聴解演習

2.1.1 目標

- ・繰り返し聞くことで、日本人が話す日本語が聞き取れる聴解力を育てること。
- ・繰り返し聞くことで体が日本語に慣れ、自然なコミュニケーションのためのベースができること。

2.1.2 内容

①シャドーイング：教材名「Shadowing 日本語を話そう（初～中級編）」

読んで理解できるフレーズを、耳で捕らえ、それを繰り返し口にするすることで、教科書を中心とした「文字」の日本語から、コミュニケーションのための「音」の日本語へ移行することが期待できる。

②聞き書き取り：教材名「the way of life in Japan」（国際交流基金作成ビデオ）

できれば外国人が日本で遭遇するであろう会話の教材を使いたかったが、現地になかったため、上記のものを使用した。

まず、グループ分けをさせた。3人のグループが4つ、4人のグループが2つできた。

それから、日本の留学生活に関係あるトピックのものを6本選び、最初の5分間を見せて、各グループに選ばせた。⁽³⁾

次にグループごとに1台のパソコンで、約15分程度のトピックのナレーションの部分を中心に聞き取り、それを用紙に書き写してスクリプトを完成させた。

普通のスピードの日本語であるから1度や2度で聞き取り、書き写すことは難しく、何度も聞く練習になった。固有名詞は適時教えた。早いグループは2つのトピックを仕上げる事ができた。

2.1.3 総コマ数（短文、会話の聞き取りを含む）：60 コマ

2.1.4 実施後の感想

①シャドーイング：

- ・聞き取る力の基礎、また発話するための口の構えを作るのに有効だと感じた。
- ・比較的テスト成績がよくない人が元気よく口を動かしていた。

②「the way of life in Japan」の聞き書き取り

- ・日本語学習者のための素材でなく、生の日本語の聞き書き取りは想像したより難しかったようだ。
- ・文字があれば理解できる日本語を、耳だけで正確にキャッチすることの難しさを感じたと思う。

2.2 科目名：総合アクティビティ

2.2.1 目標

- ・学習者それぞれが定めたテーマについて調査する活動の中で、考える、日本語で表現する、対話をする、意見を言う、相手の意見を聞く、発表するといったそれぞれの言語行動を実践

することにより、コミュニケーション力、及び日本語運用力の向上を図る。

・学習者一人ひとりが自律的学習の方法を確立する。(4)

2.2.2 活動のきっかけ

今回、「総合アクティビティ」という活動を企画、実施したきっかけを以下に述べる。

日本語教育は通常、教室においてなされる。そこには机と椅子、ホワイトボードなどがあり、教師と学習者がいる。教師は日本語の、発音や文字や文の構造などを提示し、学習者はそれらを理解し、口頭や文字などで練習し、次第に日本語を自分のものにしていく、というのが一般的な日本語教育のイメージだと思われる。

日本語にかかわらず、ことばは生活のいたるところで必要に応じて使われるものだ。しかし、教室という限定された空間では、実際に必要に応じた状況でことばが使われる例は少ない。たがいは使われる状況を想定した、練習という形で終わることが多いのではないだろうか。

筆者が大学院で受講していた授業でネウストプニー先生 (J. V. Neustupny) が「教室での活動は練習だけに終わってはいけない。授業で学習者が自分のことばとして日本語を使うための工夫を、教師はするべきだ」とおっしゃったことがあり、共感を覚えたが、実践にはいたらなかった。

その後、細川英雄氏の「日本語教育は何をめざすか」を読み、同氏の、「考えるための日本語」などの著書から、「総合活動型日本語教育」の考え方を知った。そして、学習者の言語活動の育成のためには、「学習者自身が、あるきっかけを通じて、自分のテーマを見出し、自らのことばを用いて考え、表現できる言語活動の場、すなわち学習者にとっての具体的なコミュニケーションの環境が設定されることが必要」(細川2004:13)という箇所から、実践への具体的なイメージを得た。

「総合活動型日本語教育」の考え方を踏まえ、自己流に計画を立て、実践したのが「総合アクティビティ」である。

2.2.3 「総合アクティビティ」の内容:

以下の活動を組み合わせた総合活動型プロジェクト・ワークである。

- ①プレゼントゲーム：これからの活動に向けて、和やかな雰囲気を作り、また、クラスメート同士が互いに知り合うためのゲーム。
- ②活動のはじめに：活動の目的、大まかな流れ、スケジュールを説明する。
- ③コース全体のテーマを示す：「日本について知りたいこと」
- ④学習者一人ひとりのテーマを決める：日本に留学する自分が日本の何に興味があるか自己分析する。その後、全員が他の人と異なる自分だけのテーマを設定する。テーマはベトナムと日本で違いがあるもの、インターネットで調べられるもの。自分にとってのそのテーマの意味を考える。グループディスカッションと作文によってテーマを絞り込んでいく。
- ⑤作文：テーマについて。テーマに選んだ理由をわかりやすく自分のことばで表現して提出する。教師はコメントをつけ、学習者に返却する。基本的に訂正、添削はしない。わからない部分、具体的でない部分にコメントをつけ、返却する。学習者はコメントを読み、考えをまとめ、

再度書き直して提出する。

⑥ディスカッション：聴解演習のときのグループで、互いのテーマについて意見交換をする。説明がわかりにくいとき、疑問があるときは質問をする。何度か繰り返し、それぞれのテーマを深化させる。

⑦インタビュー：学習者はそれぞれのテーマに関する質問を5問用意し、少なくとも5人の日本人にインタビュー調査をし、結果をまとめる。

⑧スピーチ発表：それぞれのテーマについて、インターネット、インタビューによる調査の結果をまとめ、口頭で発表する。一人5分程度。発表後、学習者、来場者全員で相互評価をする。⁽⁵⁾

⑨「ゲストと話そう」：ビジターセッション。授業の中で生きた日本語を使わせることを目的に、ハノイ在住の日本人に授業に参加してもらい、学習者と交流の場を持った。⑦のインタビュー活動にも参加してもらった。

2.2.4 総コマ数：52 コマ

2.2.5 実施後の感想

①2年目の今年の学習者は1年目と比較して、文字を伴った日本語の力はそれほど遜色ないが、音だけの、聞く、話す日本語の力は弱く、自信がないようすの人が数人いた。それを少しでもカバーするために、時々日本人に授業に参加してもらい、日本語の実際使用の機会を多く持つことで、音の日本語に慣れ、コミュニケーション力のアップにつながることを目指した。

②「ゲストと話そう」と題したビジターセッションを計7回(14コマ)行った。昨年度は赴任した直後だったこともあり、1回しか行くことができなかった。しかし、2年目の今年は人脈も広がり、留学生、主婦、日本語教師など、毎回7人から13人の日本人ボランティアの方に来ていただくことができた。

③授業中に学習者はゲストの日本人と直接むきあうことで、話さなければならない状況が生まれ、はじめは口の重かった学生も少しずつ口を開いていく様子が見て取れた。また、日本語で長く話すことができるようになったという報告も数人からあった。

④「ゲストと話そう」は、話すテーマを決めて行った。最初は、初めて会った人との会話ということでテーマを設けなかったが、3回目から「一番好きなもの・こと」「(写真などを使い)互いの文化を紹介する」「学生からのインタビュー」「ベトナム人に聞きたい日本人の質問」などのテーマを設けた。

⑤今年度はこの「ゲストと話そう」による成果が大きかったと思う。コミュニケーション力の育成は教科書や文字で学ぶのではなく、実際に使用する場を与え、耳と口を使い、体で覚えていくのが一番だと実感した。修了後のアンケートでも、学生にこの授業活動は高く評価されている。聞く、話すことについて、自信がついた、向上したと答えた人が多かった。⁽⁶⁾

3. コースの反省と今後の課題

①総合アクティビティ：このコースは日本留学に向けたブラッシュアップのための特別コー

スである。数ヵ月後に日本に行く彼らに知識を教えるだけの授業ではなく、2年間学んだ日本語を使い、自分のイメージや考えを日本語で表現できる力を備えさせたいと思った。「現在すでに身につけていることばを、人間関係の場においていかにして使えるものにするのか」(細川2004:9)という課題を胸に置き、教室を単なる練習の場でなく、生きた日本語を使う場にするにはどうすればいいか、悩み、迷い、ともかくシラバスという形にした。そして、「①4技能を総合したコミュニケーション活動を行う②具体的な目標を持った活動を軸とする③学習者の“考えていること”を扱う」(細川2007:11)ことを重要なポイントと位置づける「総合型日本語教育」をモデルにして作ったプログラムを「総合アクティビティー」と名づけ、一連の活動を通して学習者の運用能力の向上を図ろうとした。

実践したいいくつかの活動の中で、難しかったのは、学習者一人ひとりのテーマを決める活動だった。ベトナムでは暗記型の受け身の学習が一般的であるという。作文等のテーマについても教師が決めて全員に同じものを与えるという。だから、他人と違うテーマを自分で考え、決めるという作業は苦手らしく、消極的な姿勢の学習者が多くいた。また、考えて、作文に書いてきたテーマにも抽象的なものが多く、もっとわかりやすい具体的なものを、と何回も書き直しを指示した。

②機材：PCを昨年同様、6台申請したが、割り当ては5台だった。その5台のうち正常に動くのは2台だけだった。仕方なく、学習者に頼んで自分のPCを持ってきてもらった。修理に出した3台もなかなか直らず、1台は最後まで戻らなかった。また、アニメを使った授業で、プロジェクターが必要だったが、専用のものがなく、他の部署から借りて間に合わせた。

③新しい科目：今年度は、文章表現、科学記事の読解、ドラマ、発音などの新しい科目を設けた。その中で、大学でレポートを書くための下準備として設けた「文章表現」は、翻訳の練習という方法が、レポートを書く上で役に立つのではないかと思い、始めたのだが、素材が少し難しく、時間が少なかったこともあり、成果といえるまではいたらなかった。頭の中の母語や英語を適切な日本語に移し変えること、そしてそれが習慣化するまで、まだまだ道は遠いと感じた。「考えたことを日本語で書き表す力を育成する」ことは残された課題である。

④今期の収穫はなんといっても、発話力が向上したと感じた学習者が多かったことだ。海外の自分の国で日本語を学ぶ場合、授業以外に日本語に接する機会はほとんどないのが実情だ。語学の勉強は、習ったことを使ってみて、使えることがわかってはじめて、学ぶ楽しさを感じるものだろう。その意味で、7回行った「ゲストと話そう」は学習者のコミュニケーション力の向上に寄与し、学ぶ楽しさを与えたものと思う。

⑤卒業後：2年目の学習者たちは現在、2つの大学の3年生に在学中で、成績は、1名以外「AかA+」「大変よい成績」だとのことである。2010年の8月には東京と滋賀で彼らと会い、食事を共にした。彼らとは、今もfacebookを通じて連絡を取り合っている。

おわりに

2年間のハノイでの日本語教育の体験は貴重なものだった。一つのコースをデザインし、授

業の中でさまざまな活動を試み、それらは結果を伴い、一日ごとに一喜一憂した。考えあぐねた時は、他の人はどうするかを知りたいと思った。だが、国外の現場にあつては、一人で模索しながら進めるしかなかった。

同僚の教師の授業を見学することがいい勉強になるように、実際の授業の記録は多くの教師にとって、貴重な参考例になると思う。だが、現実には授業の実践報告はまだまだ少ないのではないだろうか。さまざまな教育現場でのさまざまな実践報告を待ちたいと思う。

注

- (1) 1年目に比べ、2年目のコーススケジュールは不規則で、やりにくいものであった。12月まで学習者は3年生としての正規の授業を受け、空いた時間に集中コースの授業に参加する関係上、9月、10月は週8コマ、期末テストを控えた11月、12月は週6コマしか授業ができなかった。そのため、その時期は学習者のモチベーションを維持するのが困難だった。また、期末テスト期間の4週間は授業できないということだったので、翌2010年1、2月に1日6コマ、週にして30コマというスケジュールを組んで、ようやく1年目を少し上回るコマ数を確保することができた。
- (2) 今年度は9月開講直後に日本留学試験模擬試験、11月に日本留学試験本試験、12月に日本語能力試験が予定されていたため、9月～12月までは試験対策的な授業を多くせざるを得なかった。
- (3) 聞き書き取り用教材のタイトル：「Foreign Student, Homestay, University Student, Freeter, College Woman, Sarariiman」
- (4) なぜ、「総合アクティビティ」の目標の一つに、「自律的学習の方法の確立」をあげたかについて、述べる。留学するということは基本的に外国で一人で生きるということである。大学の生活においても日常生活でもさまざまなことを自分が決定し、行動し、解決していかなければならない。日本に行くにあたって、他人の力をあてにしないで、できる限り自分の力でものごとを切り開いていく力を育てることの必要性を感じた。それで、「総合アクティビティ」で、テーマを設け、調査し、インタビューを行い、発表をしていく過程で自発的に活動し、自分なりの学習方法を見つけるように求めた。学習者に「自律学習」を意識させて行ったことは以下のようなことである。
 - ①全体のテーマをふまえ、自分のテーマを設定する。教師がテーマを与えるのではなく、学習者自身が考えだす。そのテーマは自分が興味を感じていること、また、他の人と違うこと、抽象的な大きいことではなく、自分で調べることができる範囲の具体的なこととした。
 - ②グループ活動が多かったが、グループのメンバー構成を学習者たちに任せた。また、各グループ内で全員が、司会、発表、記録などの担当を持ち、ただ参加するだけのメンバーがいないように指示した。
 - ③4つの活動を学生主体で行かせた。「テーマについての調査をまとめたスピーチ発表」その後の「ゲストを交えての懇親会」、「立命館大学に行く人たちのための関西弁講座」、「今年度の活動をまとめた修了記念文集の作成」という作業を、それぞれのグループに協議させ、案としてまとめ、提出させ、関係者に連絡、当日の進行をまかせた。
- (5) スピーチ発表のテーマ例
日本の公共の乗り物／日本に留学するとき、どんなものを持っていったほうがいいですか／どうして日本のお金で印刷される写真の人はいろいろいますか／日本の物価は高いと言われるが、実はどうですか／日本の奥さんは世界一ですか／日本語の相手の呼び方／どうして日本人はそんなに忙しいんですか／着物／生で食べる日本人の好み、など。
- (6) コースの最後に、コース全体に対する「総合アンケート」を学習者にしてもらった。その中の、「どんな力が伸びたか」という設問に対しては「話す力」が17票で一番多かった。以下、「読む力」が

16票, 「聞く力」が14票, 「発音」10票と続く。具体的には「自信を持って話すことができる」「話す力がついた」「日本人と話す機会がたくさんあった」「ゲストと会話したおかげで, 日本のいろいろなことがわかるようになった」などの回答を得た。

引用文献

細川英雄 (2002) 『日本語教育は何をめざすか』明石書店.

細川英雄 + NPO 法人「言語文化教育研究所」スタッフ (2004) 『考えるための日本語』明石書店.

細川英雄・牛窪隆太・武一美・津村(田中)奈央・橋本弘美・星野百合子 (2007) 『考えるための日本語【実践編】—総合活動型コミュニケーション能力育成のために』明石書店.

朝日新聞科学グループ編 (2008) 『いまさら聞けない科学の常識・1』講談社.

斎藤仁志他 (2006) 『Shadowing 日本語を話そう(初～中級編)』くろしお出版.